

①家族間の会話のような近距離伝達においては了解度が高いから、いわなくともよいような部分から文法構造の a フウカがおこる。主語などは見当がつくから省略される。第二人称もわかりきっているから敬語などの中に転化される。線の表現でなく重要な部分をおさえた点的表現になるのである。①省略が大きく、論理上は飛躍したと見える表現になる。

②こういう近距離伝達の特徴が、たんに親しいもの同士の言語活動に限らず、全体の性格になってるのが日本語の歴史である。このために、明治以降、日本の知識人たちは日本語が非論理的であるというコンプレックスに悩んできた。日本語が島国言語で、島国言語には大陸言語とは違った種類の論理が内在するということは現在でもまだよく理解されていないのである。

③島国言語は表現の受け手の立場を尊重する。つまり読者、聴者は高度の理解力の持ち主であることを筆者、発話者が b ゼンテイとしてしていることである。そういう受け手に対して、言いたいことをくまなく言い尽くすのは失礼に当る。ほんのり触れるだけで、あとは相手の想像や c オモワクに任せてしまう。あえて誤解されることも怖れない。

④芭蕉は、「いひおほせて何かある」と教えているが、これは詩歌の道だけのことでなくて、受け手尊重の社会においては、広く日常生活に生きる原則なのである。ここで、芸術と人生とが同じ基盤の上に立つものであることを改めて考えさせられる。

⑤詩歌、文芸作品ばかりでなく、人間関係一般について、余韻や余情の豊かさが喜ばれる。あまりはつきりしすぎないことが大切である。「軽い」と感じられないためには、つねに「含み」がなくてはならない。表現も人間関係もあり d ロコツに明快なのはこまる。適当にぼかされていないとおもしろく感じられない。

⑥ヨーロッパの言語では、曖昧を嫌い、明晰を重んじるけれども、島国言語の日本語ではむしろ曖昧のおもしろさに敏感である。「夜目、遠目、笠の内」というようなことばは、いかにも日本人の感覚をよく伝えている。

⑦洒落れた、いきなことば遣いや人間関係が尊ばれる。e ツウジンツウジンの社会である。したがって、野暮はいわないこと、となるのである。くどくどいうのはうとましい。さらりといい、さらりとかわす。発話者が本心を象徴的に表現すれば、受け手もこれを斜めに受けとめるといふように禅問答のような会話が「大人」のやりとりとされる。

⑧いよいよ重大な問題になると、お互いにかえって口数がすくなくなってきた、いわゆる②腹芸腹芸がはじまる。このときの沈黙はなまじつかのことば以上に表現力があるのである。一人前の人間になるには、この③「沈黙の言語」を解する訓練を経なくてはならないのが島国言語の社会である。言語を言語として理解するのではなく、いいたいことの真意をより大きな生活のコンテキスト（「場」）の中へ溶解して、ごく一部を氷山の頭のようにことばとして表現し、水にかくれた残りの部分は受け手の人間理解のパターンに合わせて想像し了解するところ、ことばのやりとりのおもしろさ、人と人とのつき合いの味わいを感じとるようになっていく。あえていえば、社交解釈学というものが必要になるのである。

問一 二重傍線部 a～e のカタカナを漢字に直せ。

問二 波線部「いひおほせて何かある」の意味として最も適当なものを、次から選べ。

- ア すべてを言い尽くすべきだ
- イ 意見を言い通すべきではない
- ウ 相手を見て言うべきである
- エ すべてを言うべきではない
- オ すべてのことばは曖昧だ

問三 次の文を本文の適当な段落の最後に入れてたい。最も適当な段落の数字で答えよ。

- ・何でも外国の物差しで測るくせはもうそろそろ卒業したらどうであろう。

問四 段落3以降の具体的説明は、日本語のどういう点についてなされたものか。それを示す部分を、「点。」で終わるように、文中から十五字以上二十字以内で抜き出し答えよ（「点。」は字数に含まない）。

問五 傍線部①とあるが、例えば「僕はうなぎだ」という発言は、どういう場面で発せられたと考えることができるか。二十五字以内で答えよ。

問六 傍線部②の性格としてあてはまるものを、次から二つ選べ。

- ア ヨーロッパ的である。
- イ 「以心伝心」と同根である。
- ウ 幼児性が強い。
- エ 学術上の議論に向いている。
- オ 「行間を読む」に共通する。

問七 傍線部③とあるが、これは日本語のどのような特徴を表しているか。「という特徴。」で終わるように三十字以内で答えよ。（「という特徴。」は字数に含まない。）